

だ。

それからしばらくして、エム博士は道でおとなりの女の子に会った。声をかける。

「そのご、おとうさんはお元気かね」

「ええ。だけど、ちょっとへんなことがあるわ。このごろ、ねごとを英語で言うのよ。

いままで、こんなことなかったのに。どうしたのかしら」

眠っているあいたの勉強が役に立つのは、やはり、眠っている時だけなのだった。

試作品

エム博士の研究所は、静かな林のなかにあった。博士はそこにひとりで住んでいる。町から遠くはなれているので、だれもめったにたずねてこない。

しかし、ある日、あまり人相のよくない男がやってきた。

「どなたでしょうか」

と博士が聞くと、男はポケットから拳銃けんじゆうを出し、それをつきつけながら言った。

「強盗だ。おとなしく金を出せ」

「とんでもない。わたしは貧乏な、ただの学者だ。もつとも、長いあいたの研究がやっと完成したから、まもなく景気がよくなるだろう。しかし、いまのところは、金などない」

こうエム博士は答えたが、そんなことで、強盗は引きさがりはいしない。

「では、その研究の試作品をよこせ。どこかの会社に持ちこんだら、高い金で買いと

つてくれるだろう」

「だめだ。渡さない。ひとの研究を横取りしようというのは、よくない精神だぞ」

「それなら、ひとりで探し出してみせる」

強盗は、逃げ出さないようにと、博士の手を引っぱって、研究所のなかを調べまわった。しかし、試作品らしいものは、どこにも見あたらない。

最後に小さな地下室をのぞいた。なかはがらんとしていて、机とイスが置いてあるだけだった。強盗は博士に言った。

「どうしても渡さない気なら、ただではすまないぞ」

「拳銃の引金をひくつもりなのか」

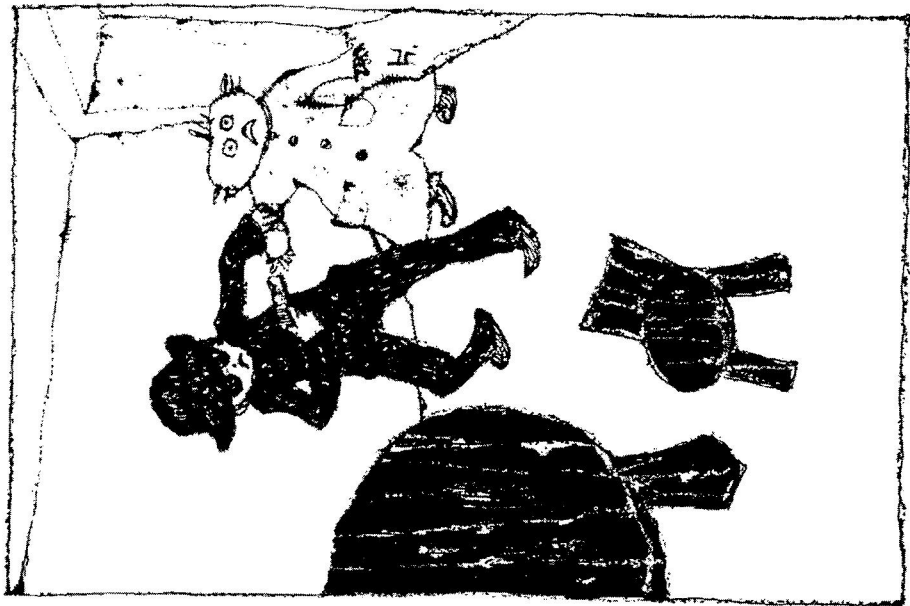
「いや、殺してしまつては、品物が手に入らない。いやでも渡す気になる方法を、考えついたのだ。さあ、この地下室に入れ」

「いったい、わたしをどうしようというのだ」

「あなたを、このなかにとじこめる。おれは、入口でがんばることにする。そのうち、空腹のため悲鳴をあげるだろう。品物を渡す気になったら、すぐに出してやる」

「ひどいことを思いついたな。だが、そんな目にあわされても、決して渡さないぞ」

博士はあくまでことわり、ついに地下室に押しこまれてしまった。



かくして、一日がたった。強盗は入口の戸のそとから、声をかけた。

「さぞ、おなががすいたことだろう。いいかげんで、あきらめたらどうだ。こっちは食料があるから、当分は大丈夫だ」

「いや、わたしは絶対に負けないぞ」

「やせがまんをするなよ」

しかし、その次の日も、そのまた次の日も同じことだった。声をかけると、なかで博士が元気に答える。時には、のんきに歌う声も聞こえてくる。

一週間たち、十日が過ぎた。

まだ博士は降参しない。そのころになると、強盗のほう弱ってきた。手持ちの食料もなくなりかけてきたし、戸のそとでがんばっているのにも、あきた。それに、なにも食べないでいるはずなのに、あいかわらず元気な博士が、うすきみ悪く思えてきたのだ。

「もうあきらめた。いつまでいても、きりがなさそうだ。引きあげることにするよ」

強盗は、すごすこと帰っていった。エム博士は地下室から出てきて、ほっとため息をついた。それから、こうつぶやいた。

「やれやれ、やっと助かった。試作品が地下室にあったとは、強盗も気がつかなかっ

たようだ。わたしの完成した研究とは、食べることのできる机やイスを作ることだったのだ。おかげで、その作用を自分でたしかめることになってしまった。栄養の点はいいが、もう少し味をよくする必要もあるな。きっと将来は、宇宙船内や惑星基地での机やイスには、すべてこれが使われるようになるだろう。そして、万一の場合には、大いに役に立つにちがいない」